第1回

「荻窪の記憶」こぼればなし

善福寺川が四万十川だったころ

当協議会では、一昨年から住民の方々の協力を得て、荻窪の歴史を掘り起こし、後世に伝えるプロジェクトに取り組んでいます。その成果の一端はパネル展示『荻窪の記憶』で発表しましたが、こぼれ落ちた「記憶」も少なくありません。そうした「記憶」を拾い集め、ご紹介しようと本コラムをはじめました。ご一読いただければ幸いです。

さて、みなさんは、かつての善福寺川が四万十川にも匹敵する清流だったことをご存知でしょうか。「本村庵のあたり、水がきれいで、いまは北海道か四万十川にしかいないような巣をつくる淡水魚もいっぱいいたですよ」というのは、大正10年生まれのMさん。巣をつくる魚とは「清流の象徴」といわれるトゲウオの仲間で、雄が巣を作り、卵の世話をする動物行動学上も珍しい魚です。

さらにこんな証言も残っています。「昭和の初め頃まではカワウソがこの辺りにいましたよ、夜釣りに行って何回となく、ポシャーンをやられました」。カワウソは川の生態系の頂点に立つ食欲旺盛な肉食動物です。そのカワウソが善福寺川に生息できたのは、餌となる魚や甲殻類が豊富だったからでしょう。さすがに流域の宅地化が進むとカワウソは姿を消しますが、多様な生き物が棲む川は都会からきた子供たちの格好の遊び場になります。そこでは、優等生よりいたずらっ子が幅を利かせ、生き物の生態や漁の仕方にも通じていました。

そんな子供たちの記憶の断片です……

◆親戚がくると羨ましがるのよ。川でいたずらできるし、洞窟はあるし……

◆川には魚がいっぱいいた。ハヤもいた。タナゴは口が小さくて引っ掛けるのが難しかった。

◆近衛さんの下あたりに行くと、魚が手づかみでとれるのよ。

◆田に水を引く頃になると1.5センチぐらいのコブナがいくらでも獲れた。親フナが産卵のために流れの緩やかな細流に入って、卵を産み、ふ化したコブナだ。

◆荻外荘に池があって、春になると、池の水を流すのだが、ガマガエルがいっぱい出てきて驚いた。ウシガエルは田端神社の方にいて、ウーウー鳴いていた。アカガエルは薬になるというので私も食べた。

◆生垣を潜って大田黒さんの庭に入り、二つ目の池でエビガニをとった。エサはカエルの肉。捕まえて皮を剥ぐ。

◆蛍がたくさんいて、手でつかめるくらいだった。

いまでは、これらの回想が東京の子供たちのものだとは信じてもらえないかもしれません。しかし、ある時代までの善福寺川は自然の生命力に溢れ、幸運にも子供たちはそれを存分に享受したのです。これも、武蔵野に出現した郊外住宅地の記憶の一コマにほかなりません。

（「荻窪の記憶」プロジェクト　松井和男）